

昭和三十九年一〇月例会

一〇月三日(土) 午後一時より

於 京大陳列館第二教室

サラワク・ブルネイ(ボルネオ)の農村生活

杉原 正義氏

昭和三十八年九月から三十九年五月にかけて、京都大学ボルネオ学術調査隊の一員として滞在したボルネオのサラワク・ブルネイ地方の農村について、日常生活、住居等の実体からはじまり、焼畑を中心とする農耕技術、農村の社会関係等について、豊富なカラーズライドを駆使して説明された。なお持帰った土俗品の展示解説も行なわれた。

昭和三十九年度史学研究会大会

十一月一日(日) 二日(月)

第一日見学会「古墳めぐり」は、横山 浩一氏(奈良国立文化財研究所)の、

指図を使用した懇切な解説のもと、佐紀古墳群(ウツナベ古墳・コナベ古墳・ヒバス媛陵・成務陵)・応神陵・高

井田横穴・仁徳陵・鎌足廟・將軍山古墳の順で巡回した。折よく好天にめぐまれ、古墳の周辺を散策するには絶好の日好となり、各時代の古墳について認識を新たにした。將軍山古墳は、取潰中であるが、淀川平野の夕景を俯瞰してのち、名神高速道路を経由して帰洛した。

第二日総会および大会は、午後一時より京都大学楽友会館において開催した。総会は、織田武雄理事長代理(田村実造理事長は外遊中)の挨拶について、佐藤長委員より会務および会計の報告が行なわれた。

公開講演は、東京大学教授堀米庸三氏および京都大学教授赤松俊秀氏(本会常任理事に)より、次の通り行なわれた。

中世ローマ法王権の勝利と危機

——とくにイノセント三世の場合——

堀米 庸三氏

昭和三十六年の史学会大会で、私は「正統と異端——グレゴリウス改革の一断面」と題する公開講演を行った。中心主題は、

この改革に際して掲げられたローマ教会の秘蹟論が、瀆聖聖職者の排撃、ことに俗人叙任権の否認に急なあまり、カトリシズムの立場「事効論を逸脱し、これに対立するドナティスト異端の立場」人効論に走ったため、教会の勝利ののちには、かえって、十二・三世紀の異端的宗教運動を惹起した、という点にあった。しかしその際の論義は、グレゴリウス改革期の秘蹟論の分析を中心とし、グレゴリウスの秘蹟論の偏向がよびおこした宗教運動そのものの性質はもとより、この偏向のローマ教会にたいにおける矯正については、十二・三世紀の法王教令について一応の検討を行うにとどまった。

この度の講演は、これまで見透しに終っていた部分を再検討し、中世における「正統と異端」の問題に一つの結論を与えようとしたものである。

出発点は、十三世紀初頭におこなわれたイノセント三世による聖フランシスの修道会「小兄弟団」の認可にまつわる事情にある。この認可が史的に全く不明の箇所を残していることは、一二一五年の第四ラテラン公会議の決定における、一切の新しい修道会の認可禁止をうたった箇条とともに、

研究者に多くの疑問をおこさせるものである。結論をさきにいえば、この二つの事實は相互に密接に関連するもので、しかも中世ローマ法王権の最盛期を現出したイノセント三世の政治が、意外にもローマ教会内の執拗で頑強な反対をおしきって行われたことを示すものなのである。

十二世紀はいわゆる「使徒的生活」^{ゾク・アポステリカ}を追求する宗教運動が、西ヨーロッパのいたるところにおこった時期である。この運動は同時代の都市生活の展開、十字軍、十二世紀ルネサンス等の諸現象と密接に関係するものであるが、その根源は、グレゴリウス改革の腐敗聖職者攻撃とそのため民衆の動員によってかきたてられた人心が、信仰の理想を、既存の教会秩序をこえて、原始キリスト教に求めたことに発する。人々は使徒のように自発的な貧困^Ⅱ清貧に生き、使徒と同じく主の言葉の宣布^Ⅱ自由説教を使命として感じた。この運動の中から、十一世紀末から十二世紀前半にかけて、いくつかの大修道会が生れたが、その最大のもの、シトー修道会も、福音の自由説教を目的としたものではないが、同時代の宗教運動という背景なしにその隆盛を説明するこ

とはできない。

グレゴリウス改革の理想が消えなかった十二世紀の前半まで、使徒的生活^{ゾク・アポステリカ}の諸形態は、ローマ教会の発展をそのままに示すものであったが、同世紀の中葉にはじまるカタリ派異端の西欧浸透とともに、ローマ教会はこの運動の中心目的である福音の自由説教に強い不安を感じ、これを既存の体制の中に吸収しようとするにいたる。ことに自由説教者の多くが異端と共通な人効論的秘蹟論に立ち、激しい教会批判を展開するに及んで、ローマ教会はグレゴリウス改革の目的達成のために自らえらんだ手段^Ⅱ人効論的秘蹟論の收拾に悩まざるをえないことになる。ここに急速に保守化することになったローマ教会は、他方、それに反比例して急進化する宗教運動の処理に窮し、一七九九年の第三ラテラノ会議、およびとくに一一八四年のヴェロナ公会議を経て、カタリ派のみならずワルド派をはじめとする一切の使徒的生活の宗教運動を異端として教会外に追放するにいたる。

これはしかし、客観的にみれば、グレゴリウス改革によって勝利したローマ教会が、当然引受けねばならなかった責任の放棄で

あり、その結果おこった正統と異端の対立は、教会の外面的隆盛にかかわらず、その最も深刻な危機を意味するものであった。この危機の意味するところを正しく認識し、いわば、ギリゴリウス改革に伴うローマ教会の歴史の責任を一身に引受けたのがイノセント三世である。彼の弾力ある宗教運動の対策は、ヴェロナ公会議の決定によって教会外に放逐されたいく多の宗教運動を、再び教会内に吸収し、これを異端に対する防波堤とすることに、ローマ教会の危機をすくい、またそれに新しい活力を与えることになった。

その最大の成果が聖フランシスの修道会認可であった。しかしイノセントの宗教家としての宗教運動への理解も、政治家としての洞察にとんだ対策も、既存の教会・修道院のもつ利害との相反のため、激しい抵抗なしには遂行されえなかった。聖フランシスの修道会認可にまつわる曖昧さはこれに起因し、第四ラテラノ会議における新修道会禁止の条項は、端的にイノセントに対する高位聖職者層の抵抗を示すものである。

(堀木)

領主と作人 赤松俊秀氏

(講演内容は論文として近く本誌に掲載予定)

学界消息

読史会

七月例会

七月二日(土)午後一時 楽友会館

ヨーロッパみてあるき

九月例会

九月二日(土)午後一時 楽友会館

自由党をめぐる

昭和三九年度秋季大会

一二月三日(祝)午前九時~午後五時

民部・家部論

刈分小作について

太田文からみた郡郷・別名制について

封建的土地所有解体の地域的特質

近世初期における奥能登農村の展開

古代の土地売買について

聖徳太子研究の一視点

和同開珍の発見について

元興寺極楽坊発見の關茶史料

近世初頭のキリスト教会の長崎貿易について

味方但馬について

東洋史談話会大会

昭和三九年一月三日(祝)

午前九時~午後五時

南宋折帛錢をめぐる

辛亥革命前後・江南の農村社会

蘇州府下の地主佃戸関係

八世紀初期における唐朝の対氏族策

——いわゆる敦煌名族志残卷をめぐる——

南陽漢画像石の意義

ダヤン・カーン物語

アッパース朝中期の土地問題

東西交通史料としてのマッカリーal-Magqari

の書

白虎観論議の思想史的位置づけ

最近清代社会研究に関する私見 D. Twitchett

田村 円澄

佐藤 虎雄

五来 重

中田 易直

小葉田 淳

西洋史読書会大会

昭和三九年一月三日(祝)

午前九時半~午後五時半

於 京大楽友会館

フランシスカン運動における貧しさの問題

政本 博

一三・四世紀イギリスにおける権力と抵抗

——ワット・タイラーの大反乱を中心として——

アンシアン・レジームにおける《Heil》と

《Conserve》の法的分析

ウル古拙文書時代は「原始民主制」時代である

うか?

P. Leroux と P.-J.-B. Buchez について

資金基金説とミルの社会改良主義

アクトンの自由の理念について

東部ノルマンディにおける綿業資本家の系譜について

イギリス保守主義の成立と発展

——思想的な考察——

富田議会多数派と七月危機

日本地理学会一九六四年秋季大会

十月二・三・四日

富岡 次郎

志垣 嘉夫

杉村 和子

世界と日本の土地利用調査

渡辺 光

三十九年六月二十日

於 関西学院大学

徳島県史に於ける自然的基础

福井 好行

北海道の開拓の発展

上原徹三郎

南予の養殖漁村

大島 襄二

延喜式の河内国槻本駅所在考

足利 健亮

へ一般研究発表

井阪 篤子

人民中国の現況―北京、延安、上海、武漢、

河野 通博

戦国時代の尾張における中心集落の形成

小林健太郎

三宅島土地制度概観

井阪 篤子

欧州―

河野 通博

農村人口の減少と中心集落

西村 睦男

西海道における古代の開発について

桑原 公徳

第五八回例会

三十九年九月二十六日

大都市周辺の都市化―阪急宝塚沿線の場合―

中井 稔

山村の経済機能類型

野村京子・榊松静江

パリアア族の焼畑農業

佐々木高明

都市分類と都市成長上における人口集中地区と都市核の問題

藤岡謙二郎

木材港整備計画の地域的効果

小池 洋一

国府研究の諸問題

木下 良

足利織維工業の地域構造

齊藤 叶吉

岩岡・大竹工業地帯における石油化学コンビナートの構造と問題点について

藤森 勉

十一月三日

於 京都大学教養部

内陸工業地の形成過程―長野県・滋賀県の場合―

木村 憲治

ペルー漁業の概観

田嶋 久

岐卓県における養蚕地域構造の比較研究

青木千枝子

需給関係よりみた府県及び府県統合地区の性格

成田 孝三

八丈島の高倉について

浅井 得一

福島盆地における果樹栽培の現況

大迫 輝通

大阪市の防災研究における人文地理学の課題

渡辺 一夫

日高山地における交通路の発達

伊藤 久雄

熊本県小岱山山麓における柑橘出作り栽培

榎井 秀三

―第二室戸台風を例に―

寛永元年刊「大日本国地震之図」の発見

野間 三郎

交通地理学について

加賀谷一良

天龍川下流の水利の発達と土地利用

規工川宏輔

四国外洋漁村のハマチ養殖

大島 襄二

新潟地震―人文地理の側からの問題提起―

渡辺 一夫

琵琶湖安土土拓地における農業と生活

竹内 常行

宇和海岸漁村の存立形態

窪田哲三郎

東京の中心地群と関係圏について

服部鍾二郎

九州山地における林野所有の歴史地理学的研究

坂本英夫

山口県内海漁村の変貌

熊野灘沿岸の後進地域としての二ヶ町

新宅 勇

人口現象からみた都市地域の拡大

岸本 実

―宮崎県椎葉村の事例―

三浦 保寿

医学地理学の方法論

前田 和夫

在日朝鮮人の人口動態の研究

魚 塘

親族集団の称呼を指標とする南西諸島の社会地理学

小川 徹

四日には、亀岡・池田コース、阪大湾臨海工業地区コースへのエクスカージョンが行なわれた。

その他シンポジウム「平地の地理学」、地形・氣候・陸水・地図に関する発表及びエクスカージョンが行われた。

魚 塘

対馬領田代宗葉行商圏の成立過程

小林 肇

地区コースへのエクスカージョンが行なわれた。

人文地理学会

第七七回例会

第五七回例会

地区コースへのエクスカージョンが行なわれた。

人文地理学会

第七七回例会